

親子二代、家族ぐるみで

藤田 一暁

昭和三十三年頃の夏だった。当時の議員会館に大平正芳代議士を、父定市の紹介状をもって訪ねた。今とちがって当時の会館は木造二階建て、ギシギシときしむ廊下、恐らく現在の半分くらいの大きさの個室、もちろんクーラーなんかない、まことに質素なものであった。どういっわけか秘書一人いなくて、先生が一人机に向かって書類を調べておられた。先生は初対面の若輩を丁重に約三十分、全くの野暮用だったけれども指導くださった。当時私は若かったせいもあるうが、先生を大蔵省のご出身ということも池田勇人大臣と特別の関わりがある方ともしらず、やわらかな語り口でいろいろとお話いただきすっかり気楽になって、政局のこと、税金のことを尋ね、また会社や家族のことを話し込んだ。先生が初対面の青年相手に、全く気さくに接しられたことを今も鮮明に覚えている。

それから四分の一世紀、まさに親戚同様のお付き合いをいただいた。昭和三十四年の妹の結婚は、池田大臣の媒酌であったが、実際は大平さんが裏方としてとりしきられた。例えば、池田媒酌人夫妻が結納のため盛装して世田谷・代田の拙宅にこられ型通りの挨拶をされたのを、年寄りの両親がなかなか広島を動けないため、親代りをつとめさせられて、まだ三十代の私が脇にじっとり汗をかきながら、しどろもどろでお受けした忘れられない思い出があるが、そのときの段取りが大平さんだったという。

大平さんが池田内閣の官房長官として活躍されるようになる、なかなかゆっくりお話をうかがうことができ

なくなつたが、それまでにできていた絆からちよつと顔を合わせただけで、近況をすばやく交換できるようになつていた。

大平さんの読書は有名であるが、ゴルフも大変お好きで熱心だった。もつとも力が入っていた頃は、ニラウンドでおさまらず、もつとやっておられたし、非常にねばりづよかった。私は十回以上お供して、ハンディキヤップを四つか五つ差し上げていたにもかかわらず、あまり勝てなかった。それもほとんど同じパターンをくりかえしていた。前半はたいてい私が圧勝していて、後半じりじりといつのまにか追い付かれ逆転された。

ある時など、最後の一ホールでひっくりかえされ、くやしさのあまり適当にあしらわれているのではとハンディキヤップに文句をつけたこともあった。たしかにねばりづよいゴルフだった。技術的には感心するところはなかったが、とにかく敗けないゴルフをやられた。私を含む同年輩の友人がよく大平さんを囲んでゴルフを楽しんだ。大平さんからいただいていたご交誼が、いつのまにかこれらの友人達のものにもなっていた。総理になられてからは、とうとう一度も一緒にできなかったことが悔やまれる。

一生のうち、親交を結べる政治家は、これからも現われるかもしれないが、親子二代、家族ぐるみお付き合いさせていただける政治家は、大平さんで終りだろう。大平さんの風貌、想い出は、私の胸に永遠にやきついて離れない。

(フジタ工業社長)